

ポーポーの木通信



121

季刊
2024年12月号

高齢になっても障がいをもっても
住み慣れた地域で住民同士助け合い
生き生きと暮らせるように
地域にネットワークを広げましょう。

発行: 特定非営利活動法人

NPOふれあい広場ポーポーの木

稲城市向陽台6-9 六丁目団地1-110

☎ (042)379-3373

稲城市平尾3-1-1 平尾住宅35-102

☎ (042)350-5057 喫茶ポーポーの木

hureaihirobauponoki@aqua.ocn.ne.jp



知ってる? 稲城

シリーズ④⑥

こうし ちょうごろう
孝子 長五郎

今から二百年前の江戸時代の頃のお話です。
押立村のある農家に、長五郎と言う子供がいました。長五郎は親の言う事をよく聞き、家の手伝い、近所の手伝い等をよくしたので、村人たちは働き者の親孝行息子だと褒めました。雨上がりの日、母からは道は乾いているから草履を、父からは道はまだぬかるんでいるから下駄と言われました。どちらも選べず下駄と草履を片方ずつ履いたそうです。長五郎が六歳の時父親が、十四才の時に姉夫婦が亡くなり生活がますます苦しくなりました。長五郎は母と農作業や薪売り等しましたが、生活は楽ではありませんでした。
成人した長五郎は結婚しましたが、妻が病死、再婚するも後妻もまた亡くなるという不運な目にありました。幼い子供三人をかかえ生活は楽ではなく、近所の人から再婚を勧められますが、母を思い断りました。

母は八十を超えていたが酒好きで、薪売りの帰りに 母のために酒を買って帰りました。夏の夜は、蚊に刺されぬよう、母の枕元で蚊を追い、冬の夜は、自分の服を脱ぎ母に着せ、炉のそばに寝かせたそうです。
長五郎の親孝行の話は村々で評判となり、江戸幕府まで伝わりました。幕府は、庶民のお手本だと褒美に銀貨二十枚と新田の開墾料を与えました。与えられたお金をもとに開墾を行い、多摩川に近い押立村では新田が増え、豊かな村へと変わって行きました。長五郎が開墾した水田は「孝子面」と呼ばれました。

稲城の昔ばなし
稲城市教育委員会
紙芝居より